

アンデルセンの性格と才能

蘆谷重常

あのやうに美しい、あのやうに善良なお話をたくさん書いたアンデルセンは、さんなに幸福な、夢幻的な、お話の中の王子のやうな生活をしたであらうかき、誰しも思ふであらうが、事實は全くそれに相異して、さん底の世界に生れ、さまざまな苦勞をなめ、いかなる想像を以てしても、一個の不良少年、精神缺損者となるより外ないと思はれたほどの子供が、あのアンデルセンになつたのである。アンデルセンの美しさや、善良さは、さうしてその童話のすばぬけた價値は、もはや一般に知られてゐることであるから、説く必要もないが、アンデルセンの生活、性格、才能等については、更に再検討を要し、再認識を要すると思ふ。

事實は小説よりも奇なりといふが、アンデルセンの生涯は、小説以上の事實である。近代の文豪の中で、アンデルセンのやうな特異な傳記をもつものは少なからう。恐らく、童話家の中で、アンデルセンほど、みじめな環境に生れ、アンデルセンほど、目ざましい最期をこげたものはない。其の死ぬる時にあつては、樞密顧問官の位にあり、その葬儀には皇帝、皇后、皇太子、皆葬列に従はれたといふ、人民の榮を極めた彼は、生れた時には、寢臺がなくて、棺桶の臺を改造した寢臺の上で生れたのである。

その血統からいふと、精神病の血統がある。彼の祖父は白痴であつた。アンデルセンは、祖父が、町の子供にからかは

れながら、歩いてゐるのを見て、幼な心に、自分の血管にその血が流れてゐると思つて、身ぶるひしたまいつてゐる。彼の父は祖父と同じやうに發狂して、彼の十歳の時に、彼を遺して死んだのである。

彼の母は、極めて善良な、温厚な、敬虔な人であつたが、また極めて無智で、世間知らずであつた。その家は極めて貧しかつたらしく、小さい時には物乞ひに歩かせられて、それをするのが厭で、終日橋の下に立つて泣いてゐたまゝいふこゝを、アンデルセン自ら語つてゐる。ある説によれば、彼女は、アンデルセンの父に嫁ぐ前に、ある職工かなにかに欺されて、父なし兒を生んだまゝいはれてゐる。

かうした悪い遺傳の下に生れた彼は、十歳で父に別れ、繼父に育てられ、十五歳で單身郷里を出で、首都に放浪し、しばしば宿無しになり、食に餓え、慘憺たる生活をした。十九歳でコーリン氏に助けられ、學校へ入つてからも、彼は常に周圍の嘲笑の對象であつた。「即興詩人」の主人公アントニオや、みにくいあひるの子は彼自身の姿なのである。

かうした、みじめな少年から、さうしてあのやうな文豪が出来たか。そこがわれわれの考察を要するところである。

彼の父は、無學で、小學校へも行かなかつたが(義務教育が充分行はれてゐなかつた頃である。少くは學校へ行つた事がある、の程度であつた。)文學好きで、ホルベルグの詩や、アラビアンナイト物語を、彼に讀んできかせることを唯一の楽しみとしてゐたまゝいふことである。彼の文學的傾向は、この父からうけたものであらう、彼の祖先には、ドイツの俳優があつた。その俳優を驅け落した娘の孫が、彼の祖母である。

しかし、アンデルセンの性格において、何よりも貴い、善良さ、敬虔さは、彼の無學な、無智な、世間的に見れば、殆ど一顧にも値しない母から承けたものであることは、いさゝかも疑ひない。これらのことを考察するに、一人の偉人が生れるためには、無數の人格が存在し、外から見ては、全く想像もつかぬやうなところに、偉人の生れる契機があることが

わかるのである。それはまことに神わざであるといふの外はない。

あのやうにみじめな家に生れ、あのやうな苦難を味ひながら、アンデルセンが、その自傳に

「私の生涯は、愉快な、波瀾萬丈な、面白いおはなしである。」

といひ、又、

「私の生涯は、善良な神様があつて、すべてのことを善きに導きたまふ證據である。」

まいつてゐるのは、いかに傾聴すべきことであらう。アンデルセンは、その無智な母も、少しもかはらぬ篤信な人であつた。十五歳の時、家を出で、始めて海峡を渡つてゼーランドに上陸した時、藁塚の蔭に坐つて、神の加護を祈つたといふことが、自傳に書かれてあるが、それから後の彼の生活には、いつも祈りがつきまきうてゐる。この信仰が、至上者に對する信頼が、彼の生命の根柢をなし、そこから彼の童話が生れたのである。このことを知らずしては、彼の童話の價値を正當に認識しがたいであらう。

この篤信は又、彼の善良ささ並行してゐる。彼はしばしば人からお人善しといはれ、自分も亦そのことを書いてゐるが、その點も、母親と同様であつた。母親の父無し子を生んだことなごも、お人善しの娘が、欺されて、性的過誤を犯したにすぎないのである。アンデルセンが、いつも人に馬鹿にされ、嘲笑の材料とされたのも、あまり善良すぎたからであつた。しかし、このお人善しは、たゞのお人善しとして終るべくあまり偉大なお人よしであつたので、その眞價が認められると、反動的に、大に神に讚美されるやうになつたのである。

さて、筆者は、三十年來兒童文學に従事し、十五年間、日本童話協會の事業に従つてゐるが、その間に悟り得た最大の

こまは、童話家たるものゝ第一の資格は、性格的に善良であるこまであるといふにある。如何に創作や口演の技術が上手であつても、性格的に不善な人間は、童話家としての資格は甚だ乏しい。極めて平凡なこまながら、これは真理であるこま信ずる。この點に於て、アンデルセンのやうな作家は、少いといつてよい。彼の性格がいかに善良であるかは、その作品によく現れてゐる。たゞへば「即興詩人」であるが、あの長い小説の中に、無数の人物が登場し、波瀾重疊の活動が演ぜられるが、其の中には、一として性格的な悪人がないのである。いはゆる、敵没、悪玉といふものゝない小説は、殆んど無いのであるが、アンデルセンだけは例外である。これは、彼の性格の善良さが、さういふ悪人を描寫するこまが出来なかつたのみでなく、さういふ悪人を考へ出すこまが出来なかつたのである。このこまは、彼の童話に於てもさうであつて、大抵の童話は、善行を引き立たせる爲に、悪玉を目立たせるのであるが、彼の童話には殆んどそれが無い。全然悪玉を缺如した作も多いが、たゞへあつても、その惡の描寫が極めてあつさりさしてをる。彼の童話の教育的價值は、この點に於て特に重視せられるのである。

アンデルセンの子供らしさも亦、此の善良に伴うてゐる。彼は實に、終生を通じて子供であつた。父親の着古しを仕立て直した、妙な格好の上衣を着て、耳まで入る帽子を被つて、彼が首都に現れた時は、漫畫そのまゝの格好であつたが、彼は平氣な顔で、大藝術家になるつもりで、名士の許を訪問した。彼がしばしば嘲笑の材料されたのは、かうした馬鹿げた舉動や、言行にもよるので、いはゞ彼自ら招いたものといつてもよいのだ。それは、彼自身に取つては、當然のこまであつた。自分が上手だと思ふから上手だといひ、傑作であると思ふから傑作であるといふのは子供である彼にまつては、當然のこまだ。こまの子供も、自ら東郷大將や、乃木大將になつて怪しまない如く、アンデルセンは、國語も十分に使

へないのに、大詩人の卵を以て任じてゐた。さうした子供らしい、馬鹿らしさが、彼の周圍に嘲笑の渦を捲き起させたのである。しかし、常識的に見ては、變な奴ださしか思はれぬ者が、子供には神様のやうに慕はれる場合が甚だ多いと同じく、此の風變りな少年は、さこへ行つても子供に取りまかれた。そこに彼の童話が生れたのである。

英國の、ある新聞記者が、アンデルセンを訪問したこゝがあつた。もう六十過ぎてのこゝであるが、アンデルセンは、さうかしてその手に刺をさしたのである。そして、痛い痛いこゝ、子供のやうに泣きわめいて、床の上をころげまはつてゐるので、實に滑稽をきはめた。また、ある人の話に、アンデルセンは、位は樞密顧問官に上り、しばしば歐羅巴の王公の客となり、其名が世界的に知られてゐるやうになつても、往來で子供に

「ソラ、偉大なるハンス、アンデルセンが通る」

こ拍手されるこゝ、こゝでも喜んで、そのこゝを吹聴しまはつたこゝいふこゝである。いかにも童心満々な人であつた。

以上は、アンデルセンの性格についての考察であるが、つぎには、アンデルセンの才能について考へよう。

童話作家はたくさんあるが、よい童話作家はすくないものである。童話こゝいふものは、本質的に詩であるが、形の上には於ては物語である。それであるから、童話作家として必要な能力は、想像力と構成力である。如何に想像力が豊かで、詩的空想が奔放であつても、構成力を缺いてゐる人の作は、童話にならずして童謡になつてしまふ。又、如何に構成力には長じてゐても、詩的天分のない人の作は、淡々として蠟を嚼むが如く、何の味もないのである。然るに、此の想像力と、構成力とを十分に兼ね備へてゐる人こゝいふものは、さう多くあるものではない。そこで、よい童話作家がなく、童話創作難こゝいふこゝが唱へられるのである。

此點に於て、アンデルセンは、實に恵まれたる人である。彼の想像は、實に、天馬空を行くが如く、雄大、莊麗を極めたる。地上を這つてゐる蟲のやうな、多くの作家の中で、彼はまさに蒼空に翱翔する巨鳥である。しかも單に、そのやうな想像力を備へたるに止まらずして、また實にすぐれたる構成力をもつてをつた。

又、「即興詩人」を引き合ひに出すが、あの大作の中に、始めから終りまで多數の人物が登場し、その中にいろ／＼な挿話を挿み、變化端睨すべからざるものあるにも拘らず、讀み終つてこれを檢するに、首尾相應し、因果瞭然として、少しの無理がなく、上手の打つた圍碁が一石一石無駄のないやうに、一字一句も動かすこゝの出來ぬものがあつて、その構成力の偉大なものには、つく／＼驚嘆されるのである。かうしたすぐれた構成力を以て、童話の創作に臨んだのであるから、その作品の非凡なのは當然のこゝである。アンデルセンは偉いこゝに一口にいふが、たゞえらい／＼でなく、何所がえらいかを検討して、自分を檢する鏡とするこゝが必要である。

以上述べたやうに、アンデルセンの童話のすぐれた點は、形の上からいへば、その構成が完全であり、その想像が豊富であるこゝであつて、精神の上からいへば、その善良さ、敬虔さである。これらのものが基礎をなして、彼の童話に特有な詩美をあたへるのである。單に話し易いといふ點では、グリムなぎの口碑童話の方が話し易いのは當然であるが、アンデルセンには、グリムなぎに求めて得られざるものゝ多くがある。それは露骨な教訓ではなくて、話そのものから放散される香氣であるが、これをよく味ひ、よく傳へるこゝを試みるのは、有益な努力であらう。子供のためにも、又自分たちのためにも。岸邊福雄氏は、童話の研究を志望して來る人に對して、先づ第一に

「アンデルセンを讀んだか、讀まないならば、三十遍、讀み返しておいでなさい。」

こゝいはれるさうであるが、流石だと思ふ。